

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530579

研究課題名（和文） グローバル化と現代巡礼文化の変容

研究課題名（英文）

Globalization and cultural change of modern pilgrimage

研究代表者

坂田 正顕（SAKATA MASAOKI）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：00063800

研究成果の概要（和文）：

本研究においては、グローバル化がいや増す現代日本において「内に向かうグローバル化」の位相に着目し、日本巡礼文化の典型例である四国遍路文化を事例に取り上げ、グローバル化による当該文化の変容過程の可能性について追究した。外国人あるいは日本人遍路、また地域関係者を対象とした量的・質的調査からは、グローバル化による遍路文化の多様な変容動向が確認された。たとえば、外国人遍路には、日本人遍路に比べて彼らの友人たちとの同行形態や相互の情報伝達の傾向が顕著であり、また、四国遍路文化が持つ重要な特徴の一つである海洋性や周回性に関して無関心な傾向が強くみられる。他方では、接待文化を重視する点は日本人遍路と同様である。こうした文化普遍的傾向と文化個別的動向の混在現象は、日本巡礼文化の将来の理解にとって有益な変容モデルの足掛かりとなるだろう。

研究成果の概要（英文）：

We researched upon the possibility of the cultural change of modern pilgrimage, taking up Shikoku-Henro as the typical case by focusing on the aspect of *inword-globalization* in contrast to *outword-globalization* (in the sense of Robertson) in contemporary Japanese society globalizing rapidly. According to the results of both our quantitative and qualitative field researches, we found many types of trends of its cultural change. For examples, compared with Japanese pilgrims, most foreign pilgrims have strong trend to get informations about pilgrimage through their friends or do their pilgrimages with their friends. Or they don't almost recognize the meaning of maritime character of Shikoku-Henro. On the other hand, they emphasize so-called Osettai from residents as in the case of Japanese ones. Such differences (particularism) and similarities (universalism) will be mixed intricately and will impact upon the culture of Shikoku-Henro in near future.

These findings are thought to be very useful clues to the model building for understanding the future of culture of Japanese pilgrimages.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：グローバル化、巡礼、普遍主義、個別主義、ハイブリッド、スピリチュアリティ

1. 研究開始当初の背景

(1) グローバル化時代の巡礼文化の理解のためには、これまでの比較巡礼研究のパラダイムであった個別巡礼文化の内在的理解モデルにとどまらず、文化横断的な外在的理解によるモデルが必要であると考えられた。このような理論的問題や課題テーマの重要性については現段階においても変わっていない。

(2) 研究対象である四国遍路においては、研究計画当初は外国人遍路が急増したステージに入りつつあり、遍路文化を構成する諸装置である札所や宿泊施設などの諸単位が、ようやくこれに対応し始めていた時期であった。しかし、研究開始後まもなく、東日本大震災により、一般外国人旅行者の激減と同様に、急増していた外国人遍路も激減した。大震災は、外国人遍路急増にブレーキをかけたことは否めないが、ようやく次第に復調してきており、長期的には増加必須の動向にあることは間違いないだろう。

2. 研究の目的

本研究においては、グローバル化がいや増す現代日本において「内に向かうグローバル化」の位相に着目し、日本巡礼文化の典型例である四国遍路文化を事例に取り上げ、グローバル化による当該文化の変容過程の可能性について実証的に追究することが目的である。外国人あるいは日本人遍路、また地域関係者を対象とした量的・質的調査からは、グローバル化による遍路文化の多様な変容動向を確認し、そこからその他の日本の巡礼諸文化の将来にとって有益な変容モデル設定の足掛かりとなる知見を導出することが最終的な目標である。

3. 研究の方法

主として、以下の3つの調査により、外国人遍路関連の実態概要を把握することにより、そこから巡礼文化の変容に関する知見を抽出することにした。

(1) 外国人遍路に対する量的調査法

外国人遍路に対する、①遍路意識、②遍路行動、③諸属性、を三本柱とする調査票（英語版・韓国語版）を関係先（札所および遍路宿など）に留め置き・応募回収法による有意抽出調査により、外国人遍路固有の特徴（次項(2)の日本人遍路調査との比較も加味して）を抽出し、従来の日本ローカル遍路文化に与えるであろう影響についての関連事項や外国人遍路の位置・意義等に関して知見を得た。四国遍路の世界遺産化に関する評価についても探索的に調査を試みた。

(2) 日本人遍路に対する量的調査法

日本人遍路に対する、①遍路意識、②遍路行動、③諸属性、を三本柱とする調査票を関係先（札所および遍路宿など）に留め置き・応募回収法による有意抽出調査により、外国人遍路との比較はもとより、1996年度調査結果との比較研究も考慮して、現時点での日本人遍路の特徴を把握した。なお、彼らの外国人遍路に関する認識等についても把握に努めた。

(3) 地域エージェントに対する質的調査

ここでは、札所、遍路宿、住民組織、NPO等の関連団体他の地元社会サイドについて、外国人遍路に関する対応等についてを中心にインタビュー調査を実施した。

4. 研究成果

主要な結果は以下のようである。

(1) 外国人遍路の主な特徴

前記の通り、震災による外国人遍路の予せぬ激減のため、調査期間をかなり延長したが（2011年5月～2012年1月）十分なサンプル数の確保には至らなかったが（有効票数は、29票にとどまった。震災前の外国人遍路の規模は200人を超えるものだった）。

<属性> 国籍は欧米諸国を中心にした構成だったが、日本人遍路に比べて、性別では女性比率が上り（4割）、年齢は若年層、学歴は高く、宗教保持者が多い。日本在住者は1割強のみ。

<巡礼行動>

① 移動手段では、歩き遍路（約2割）は予想より少なく、約半分の者は徒歩中心だが拘らず臨機応変に電車や路線バスなどの乗り物を併用する（6割弱）傾向が強い。

② 廻り方は、ほぼ日本人同様だが、通し打ち9割近くが顕著（日本人4割）。同行者には友人が半数近く、ついで単独行4割（日本人は、単独行が6割でトップ。災害直後を勘案のこと）。

③ 巡礼作法では、納経は日本人とほぼ同程度だが、特徴的なのは「納経なし」（3割）も少なくないこと。外国人も多様である。

④ 宿泊施設は、日本人より無料宿泊施設、野宿、善根宿の利用率、とくに接待経験率（ほぼ10割）がきわめて高い。

⑤ 遍路文化を知った経緯は、「友人・知人」（6割）が最も多く、「ネット」（3割）がこれについて多い。日本人では、「人づて」は少なく（2割）、「書籍」「ネット」が上位（4割程度）を占める。

<意識>

⑥ 巡礼動機では、日本人より強いものは、「修行・精神供養」「自分発見」「日本文

化理解」(3~7割)などである。低いものは、「死者弔い」「先祖供養」(ほぼ皆無)である。死との関連が薄い傾向がある。

- ⑦ 充実感を抱く場面で日本人と異なる点は、「霊場でお参りしているとき」「接待を受けたとき」がかなり高く(4~6割)、「納経を済ませたとき」は極めて少数。
- ⑧ 道中困った点では、「お金がかかりすぎ」、「荷物おおすぎ」「宿坊が少ない」「体調崩し」(2~4割)などが、日本人よりかなり多い。外国でのせいかな?
- ⑨ 遍路関連諸装置(30項目)への3段階評価(H・M・L)では、一般に外国人のほうが高低明確な評価をする傾向があるが、遍路も同様。日本人と比べて特に高評価のものは、「山門」「一般交通標識」「遍路用道しるべ」「コンビニ」「納経帳」である。低評価の項目は「納経料」「菅笠」「公衆電話」「線香」「休憩所」であった。
- ⑩ 四国遍路文化の意義については、1)「豊かな自然」2)「日本文化の原点」3)「日本の仏教文化」「お接待の習俗」と捉える者が多く、「海辺周りの巡礼道」「弘法大師との関わり」と考える者は少ない。
- ⑪ なお、四国遍路の世界遺産化運動に関しては約7割が賛同している

(2) 日本人遍路に関する主な特徴

外国人遍路同様、回収票数は、遍路激減のため、1996年当時(1200票台)と比べて、有効票数も189票にとどまった。

<属性>

- ① 96年当時と比べて、男性比率上昇、高齢化、四国在住者比率の上昇が際立った。主因は、震災直後のタイミングによるものと思われる。宗教的には、脱伝統宗教化の傾向が強まっている(1割→3割弱)。

<巡礼行動>

- ① 通し打ち比率の上昇(3割弱→4割強)、単独行の上昇(1割→7割)が著しい。また、移動手段は、徒歩のみの者が急増している(1割→5割)。宿泊施設は、宿坊の激減と民宿化の急増が著しい。接待経験率の上昇(7割→9割)、携帯メディアの傾向(ほぼ10割に近い)も新傾向である。

<意識>

- ① 巡礼動機では、「身近な死者供養」「先祖供養」「信仰・修行」などがいずれも激減し(4割前後→2割前後)、「人との交流」「精神修養」などが急増している(1割弱→3割)。脱伝統宗教化の進展かな?
- ② 遍路充実感場面では、「霊場でお参りしているとき」が激減し(5割弱→2割強)、「人との交流」「接待や親切を受けるとき」などがそれぞれ倍増している点が目立つ。
- ③ 遍路諸装置(30項目)に関する評価では、「納経帳」「金剛杖」「白衣」「接待」「道

標」「遍路宿」「旧遍路道」などが好評価を得ており、「和式トイレ」「公衆電話」「団体バス遍路」が低評価項目である。

- ④ 外国人遍路に対する経験では、約半数が彼らを遍路途上で見かけており観察経験を持っていたが、おしなべて、外国人遍路は「装束やスタイルを遵守」し、「遍路の意味をよく理解」して、「遍路文化の普遍性」を感じ取っている傾向が強く見られた。

(3) 地元エージェントの対応

四国遍路文化に関連する地元エージェントには多様な形態があるが、主なものは、1. 札所、2. 遍路宿・宿泊施設、3. 関連NPO・接待集団などの関連団体、4. 交通・用品その他の関連民間組織、5. 行政組織などである。これらの諸組織のうち代表的な計20団体に対して、外国人遍路や世界遺産化等に関わる問題を中心に質的インタビュー調査を実施した。ポイントの一部を記せば以下のようなものである。

- ① 札所関係においては、上位組織の霊場会も含めて各札所では、概ね、現下では、「外に向かったグローバル化」である四国遍路文化の世界遺産化運動に活動焦点が当てられ、専門セクションを立ち上げてこれに対応しているのが現況である。逆方向のグローバル化である外国人遍路に対する対応では、なお、個々の札所においてそれぞれ多様に対応しているステージである。
- ② 遍路宿は、地域が外国人遍路との比較的長時間にわたる触れ合いをする典型的な現場である。多くの遍路宿・宿坊などでは、食事・入浴・トイレ・靴脱ぎ作法・受付手続など諸事にわたっての小さなトラブルが生じているが(その中でも、パスポート確認についてのトラブルなどは深刻)、いずれも、それぞれユニークな工夫をして乗り切っている様子がうかがえた。たとえば、英語表記の案内版や張り紙の設置、和洋折衷ベッドの工夫や従来の宿泊者雑記ノートの充実など、各種創意あふれる対応が試みられている。
- ③ NPOなどの市民レベルでは、お接待を中心にした遍路対応の各種の活動が試みられているが、英会話の堪能なメンバー配置など、外国人遍路にとりわけきめ細かい対応しているグループもあった(松山の1NPOなど)。
- ④ その他の関連民間組織について、ここでは、特筆すべき一事例をあげておきたい。香川県の71番札所境内にある茶屋(俳句茶屋)での外国人遍路対応事例がそれである。「俳句」を遍路にしたためてもらったことを伝統にしてきた当該地点では、多

数の外国人遍路が数多くの俳句を残しており、帰国後に返礼の便りが多数送られてきている。前述(1)でみたように、四国遍路は「日本文化理解の入り口」との意義を自覚している外国人遍路が少なくない中、本問題は「日本文化と何か」という問いかけに、一つの解法可能性を暗示しているようなケースかと考えられる。

- ⑤ 行政組織においては、各地域レベルで積極的で多様な対応をみせているが、4県合同の連携組織では、外国人遍路向けの質の良い案内パンフレット等の作成に乗り出した。県レベルでは、外国人遍路専用の遍路入門イベントの開催も試みられている。

これまで、政教分離の原則により、行政は宗教領域参入には及び腰であったのが一般的であったが、四国遍路を宗教そのものよりも「地域文化資源」としてとらえることが定着してきた様子がうかがえる現況である。

- (4) グローバル化と現代巡礼文化の変容のモデル構築に向けて

- ① 今回研究調査では、タイミング的には東日本大震災の直後のため、特別な力学がある程度働いていたと考えられるため、安易な一般化はできない点に留意する必要があることを前提に、それでも今後の動向やグローバル化の下での日本巡礼文化の考える変容に関しての洞察的知見を導出できる可能性はあると思われる。
- ② 外国人遍路の現況からは、日本人遍路の近年の動向と類似した動向および日本人遍路とは異なる傾向が合わせて見て取れる。類似した動向は、たとえば、行動面では、概して、伝統的な順打ち・通し打ち志向、フレキシブルな徒歩遍路志向、納経・白衣着用など巡礼作法へのミニマムな遵守傾向、意識的には、接待文化への高い価値づけ、四国の自然風景志向、主要な遍路文化諸装置の是認傾向などである。
- ③ これに対して、子細にみると日本人遍路とはかなり異なる点もある。属性面では、男女比率がより対等に近く、学歴の高い若中年層が多く、何よりも宗教的基盤を持つものが大半で、いわゆる「グローバル・スピリチュアリティ」の性格が顕著である(普遍主義的性格の強いバハイ教徒も加わっている)。行動面では、歩き志向とはいえ、よりフレキシブルで多元的移動手段を活用し、3分の1程度の納経忌避巡礼者がいる。また、外国巡礼のせい、友人との集団巡礼者が多く、

遍路情報も、知人友人からの人づてに經由が多い。意識面では、札所境内でのお参り時の充実感が相対的に高いのは、緩やかな宗教基盤をもつ巡礼者が多いことに関連があるだろう。

- ④ 遍路諸装置に対しては、「山門」が高評価の一番に挙げられており、日本人とは対照的である。他方で、納経料、菅笠、線香などにたいしては、拒否反応者が少なくない。費用面、生理的感覚面などが大きく作用している点がうかがえる。また、遍路文化の意味付けでは、豊かな自然、日本文化の原点、日本仏教、お接待行為などにとりわけ高い評価を与えている反面、日本人遍路にとっては象徴的な遍路行の海洋性側面や周回性遍路道そのものには大きな意味付けが与えられていないのである。

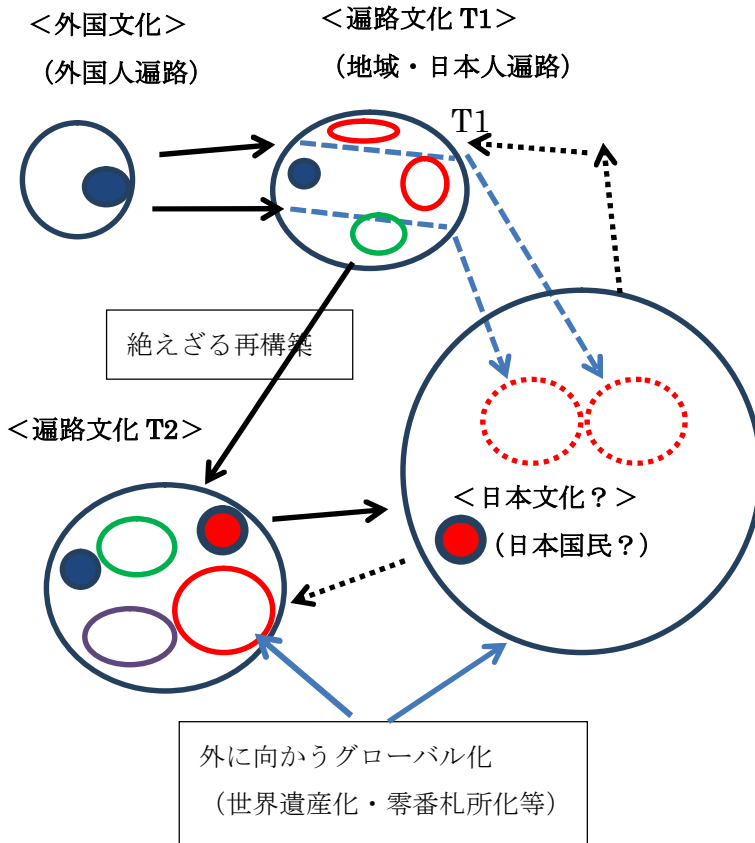
- ⑤ 以上のような状況の下で、ひとつには日本ローカルな文脈で継承されてきた巡礼文化を日本文化の一つの原点を見ようとする傾向の強い外国人遍路によって切り取られ、参照受容されていく、いわば外側から一層強化される側面(接待、自然、山門などの寺院境内、金剛杖、白衣正装、自販機、おもてなしなど)と、反対に、彼らより敬遠され、無視または回避されて、場合によってはその後退を余儀なくされそうな側面(高額な宿泊費や納経料、線香の香り、菅笠などの見直しや軽減化など)とが織りなすダイナミズムが想定される。両方向に作用する、巡礼文化部分の絶えざる再構築に向けた力学が働くであろう。

- ⑥ 他方で、外国人遍路によって意識的・無意識的に持ち込まれる諸外国の文化要素や巡礼文化要素が四国遍路文化に入り込み、現地化されたり、あるいはすでにある外国文化要素が再強化される側面もあるだろう(持ち運びやすい堅牢な機能的ガイドブック、道標のユニバーサル化、一連のバックパッカー用品、トイレ空間の拡大化の進展、ハイブリッド・ベッド利用の拡大、雑食化の進展など)。巡礼空間は、M. フーコーがいうところの、「ヘテロトピア」の様相をますます強く呈するであろうが、これらの異質な諸要素は基本的には共存原理に支配されるものと思われる。個別的なものの普遍化と、普遍的なものの個別化が同時進行するものと考えられる。

- ⑦ 以上のような事柄を総合するなら、目下のところ、経験的には、およそ以下に示す図式のような現代四国遍路文化に関する変容モデルが試案的に考えられる。そして、程度の差こそあれ基本的には、このような変容図式モデルは、小規模のロ

一カル性の強い地方巡礼を除けば、他の日本諸巡礼文化についてもかなり適用できる側面が多いと考えられるのである。

<グローバル化の中における
現代四国遍文化の変容図式モデル>



- 日本的なもの ● 当該の外国文化要素
- 四国特有なもの ● ハイブリッドなもの
- ユニバーサルなもの ○ 日本文化の原点
- 軽視化・弱体化・淘汰されるもの

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 坂田正顕 早稲田大学大学院文学研究科紀要、第58輯、2012、pp.45-62
「ヘテロトピアとしての巡礼空間」
- ② 長田攻一 早稲田学報 1185号 2010

pp.38-43

「現代お遍路の旅」

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂田 正顕 (Masaaki SAKATA)
早稲田大学文学学術院 非常勤講師
研究者番号：00063800

(2) 研究分担者

長田 攻一 (Koichi OSADA)
早稲田大学文学学術院 教授
研究者番号：10120908

(3) 連携研究者

小藪 明夫 (Akio KOYABU)
早稲田大学文学学術院・文学部 助手
研究者番号：30506142

(4) 研究協力者

平野 直子 (Naoko HIRANO)
早稲田大学文学学術院 文学部 助手
研究者番号：10608433